

Bucket警部とWield警部 -- Dickensの虚構に関する一考察 --

小野寺 進

I

Yet this third person stands there, with his attentive face, and his hat and stick in his hands, and his hands behind him, a composed and quiet listener. He is a stoutly built, steady-looking, sharp-eyed man in black, of about the middle age. Except that he looks at Mr. Snagby as if he were going to take his portrait, there is nothing remarkable about him at first sight but his ghostly manner of appearing.

"Don't mind this gentleman," says Mr. Tulkinghorn, in his quiet way. "This is only Mr. Bucket." ¹

弁護士Tulkinghorn氏から捜査を依頼され、後にTulkinghorn殺人事件の解明を担当することになるのがBucket警部である。このBucketこそ、文学史上最初に登場する警察刑事であり、以後の文学に警察刑事が登場し、重要な役割を演じる先鞭となったとされている。そして、当時腕利きの刑事として名を馳せ、Dickensが特に親交を温めていたField警部(Inspector Charles Frederick Field)こそが、Bucketの「原型」(original)であるとする見方が今日周知のものとなっている²。しかし、BucketとFieldの関連性をDickensは否定している。1853年9月17日付けのThe Timesに "Mr. Charles Dickens has made much use of Mr. Field's experiences in Inspector Bucket of Bleak House, and is, we understand, engaged in writing his life which, it would seem, has been replete with adventures." ³ と掲載されたことに対し、Dickensは翌日The Timesの編集部に次のような手紙を送っている。

To The Editor of The Times

Sir,

I observe two statements from a country paper, copied into your columns of Saturday last, and therefore made important. They represent me as having availed myself of the experiences of that excellent Police Officer, Mr. Inspector Field, in Bleak House, and also as having undertaken to write the said excellent officer's biography. Allow me to assure you that amidst all the news in the Times, I found nothing more entirely and completely new to me than these two pieces

of intelligence.

Your faithful Servant
CHARLES DICKENS 4

それから遡ること2年前、DickensはWield警部をはじめとする刑事警察の面々が活躍する読み物を、自分が編集する雑誌Household Wordsに連載した⁵。そこで語られる物語は、実際に、Dickensがある晩Household Wordsの事務所へスコットランド・ヤードの刑事部門(Detective Department)の警部や巡査部長たちを招待した際に、彼らから聞いた逸話を基に作り上げられたということである⁶。そうした事実関係からだけでも、WieldはFieldのことであると同定できるかもしれない。

Bleak HouseのBucketもHousehold Wordsの中の二つの物語に登場するWieldも共に、その原型がFieldであることは、多くの批評家によってその類似性から指摘されてきたが、DickensはWieldをFieldと認めながらも、BucketをFieldだとは認めないとする態度を固持する理由はどこにあるのだろうか。

「原型」(original)探しの研究について、George F. Fordは、原型を探求することは芸術家の想像力や独創性を侮辱する側面がある一方で、そうした探求によって、小説家の想像力を形成する力を垣間みることができるような、興味深い比較の材料が提供されるとの指摘をしている⁷。これは、事実や経験などが作者の中で、如何に虚構化されたのかわかる手がかりとなることをも暗示している。Dickensは1852年9月7日付けのJ. S. Cumming夫人宛の手紙の中で、“most writers of fiction write, partly from their imagination; and partly from their experience; ... I have had recourse to both sources.” と述べている⁸。Dickensは小説を描く際に、経験と想像力の双方を用いており、実際に経験した事柄を虚構の中へ取り込んでいることを明らかにしているように、彼の虚構行為を知るには、現実と虚構の類似性だけではなく、更にその差異性を検証して見る必要がある。

この小論では、原型であることを示す根拠となるその類似性の観点からはもちろんのこと、差異性の観点からもFieldとBucketおよびWieldを比較検討し、Dickensが物語を構築していく過程で、読者に虚構と現実をどうやって認識させようとしたのかについて、彼の虚構行為の側面から考察したい。また、呼称がFieldではなくてWieldやBucketになったことの必然性もまた明らかにしたい。

II

DickensはHousehold Wordsに、ある晩ロンドンの犯罪地区を巡回するField警部に同行した際の模様を、‘On Duty with Inspector Field’ と題して掲載した。Fieldのプロとしての手腕、信頼性、威厳などが些か誇張的に書かれているこのルポルタージュには、Fieldの人物像が次のように描写されている。

Inspector Field ... is bringing his shrewd eye...is of a burly figure, ... is the bustling speaker. Inspector Field's eye is the roving eye that searches every corner of the cellar as he talks. Inspector Field's hand is the well-known hand that has collared half the people here, and motioned their brothers, sisters, fathers, mothers, male and female friends, inexorably, to New South Wales. ⁹

Dickensの描くFieldの外観が、WieldやBucketに極めてよく似ていることは、以下に示すそれぞれの特徴から了解される。

	Inspector Wield	Inspector Bucket
外観	a middle-aged man	the middle-age
	a portly presence	a stoutly built
	a large, moist knowing eye	sharp-eyed man
身振り	a habit of emphasising his conversation by the aid of a corpulent fore-finger	his fat fore-finger are much in consultation together under existing circumstances

中年で、がっしりとした体格、物事を見逃すまいとする鋭い眼という外見的特徴が三者に共通しているが、更にWieldとBucketは共に相手と会話をする時に、人差し指を動かすという身振りの特徴を備えている。

また、Pickwick PapersのSergeant Buzfuzは実在するSerjeant Bompasをモデルとしたように、Dickensはしばしば虚構の文脈のなかで実在の人物を指示していることをほのめかす場合、それとわかるような名称を付与しており、Charley WieldもCharles Fieldを即座に連想させるよう呼称されている ¹⁰。

このような特徴からだけでも、三者には関連性があることが認知されるが、更にFieldと同様の会話術や言葉の言い回しなどがBucketにも見られる。“Well, my lads! How are you, my lads? What have you been doing to-day? Here's some company come to see you, my lads! ...” ¹¹ などといったFieldの如才ない、しかも愛想良く取り入る饒舌ぶりは、Bleak HouseでBagnet夫人の誕生パーティの席に巧みに入り込み、Bagnet一家を魅了し、Georgeをうまいこと連れ出し、逮捕するまでのBucketの弁舌ぶり(Bleak House, Ch.49)に再現されているし、Lady Dedlockを追跡する場面でも、Bucketは“my lad” という言い回しを何度も用いてもいる(Bleak House, Ch.57)。また“as his rule was to treat everybody who became his prisoner”

と、逮捕する人物をやさしく扱うFieldの物腰が、BucketのGeorge逮捕にも看取される¹²。Bucketは手錠をかける際に、Georgeに次のように言う。

‘How do you find them? Are they comfortable? If not, say so, for I wish to make things as pleasant as is consistent with my duty, and I’ve got another pair in my pocket.’ (Bleak House, p.678)

FieldとBucketの類似性を認知させる背景には、あまりに多くの原型がBleak Houseの登場人物たちの背後に見え隠れしているからだと言えなくもない。Mademoiselle Hortenseを例にとって見よう。Lady Dedlockのフランス人メイドで、Tulkinghorn氏をピストルで射殺したHortenseのモデルは、女殺人犯Maria Manningであるとされている。Sutherland伯爵夫人の娘Lady BlantyreのメイドであったMariaは、Frederick Manningという鉄道監視員と結婚するが、一方でPatrick O’connorというアイルランド人の金持ちの愛人も続けていた。妻がO’connorと駆け落ちしたことを知ったFrederickは、二人の居場所を突き止め、O’connorと共に戻るよう妻を説得する。O’connorが2万ポンドの財産を持っていることを知ったMrs. Manningは、自分を財産の相続人にするとの遺言書を作成させた後、1849年8月9日、一人テーブルに座っていたO’connorにMrs. Manningは銃を向け、頭を撃った。数千ポンド相当の株券や債券をもって姿をくらますが、やがて逮捕され、裁判で死刑を宣告される。Mrs. Manningの絞首刑は人々に公開されたが、この公開処刑に群衆の一人として目撃していたDickensは、あまりのお祭り騒ぎぶりに憤慨して、The Timesに次のような手紙を書き送っている。

I was a witness of the execution at Horsemonger-lane this morning. I went there with the intention of observing the crowd gathered to behold it, and I had excellent opportunities of doing so, at intervals all through the night, and continuously from daybreak until after the spector was over. ... When the two miserable creatures who attracted all this ghastly sight about them were turned quivering in the air, there was no more emotion, no more pity, no more thought that two immortal souls had gone to judgement, no more restraint in any of the previous obscenities, than if the name of Christ had never been heard in this world, and there were no belief among men but that they perished like the beast. ¹³

このManning殺人事件と犯人の公開処刑は、当時の人々にとっては衝撃的であり、Bleak Houseが書かれた4年後でも、まだ人々の記憶に新しい出来事だったのである。そして、Mrs. Manningの怪しげな英語、落ち着かないしぐさ、弁舌などがまさにHortenseに再現されているとの指摘もなされている¹⁴。その他にもさまざまな原型が虚構テキストに散りばめられており、Dickensの経験が如何に物語に反映されているかを伺い知ることが

できる¹⁵。

III

これまでそれぞれの人物像やそこに備わっている様々な特性についての類似性を見てきた訳だが、その差異性を検討するに当たっては、それぞれの物語(narrative)のレベルでの、指示および語りの観点から考察していくことにする。

虚構テキストとは、現実世界に存在しない人物や事柄に対する指示を含むテキストであり、言葉と現実世界の対象との対応が一致する場合は、テキストは現実を指示していると言える。では、それぞれの人物及びそれを取り巻く背景が、現実世界のものを指示するのか、虚構のものを指示するのかを見ていくことにしよう。

Fieldの場合、人物は現実世界のFieldを指示し、その背景も1851年のロンドンのある晩の犯罪地区という現実世界を指示していることは明らかである。Wieldの場合は、場所がロンドンのストランドにあるウエリントン通りのHousehold Wordsの事務所であるという現実世界の背景の中に、ロンドン警視庁の刑事部門とはあるが現実には存在しない名前の警部や巡査部長たち（もっとも、先に述べたように、それぞれが実在の人物と同定可能な名前が付けられてはいる）が登場し、過去にあった事件を語るといった体裁になっている。如何に背景が現実世界を指示するものであろうとも、その中に登場する人々が虚構のものであるならば、語られる話は虚構世界のものとなる。またBucketの場合は、小説という虚構テキストの内部に存在する虚構の人物として描かれており、その活躍する舞台は、現実のロンドンではなくて、架空の「Jarndyce対Jarndyce事件」や、架空の「Tom-All-Alone's 通り」がある虚構世界のロンドンなのである。簡単にまとめると次のようになる。

	Field警部	Wield警部	Bucket警部
人物	現実	虚構	虚構
背景	現実	現実	虚構
テキスト	現実	虚構	虚構

では次に語りの観点から見てみよう。‘On Duty with Inspector Field’では、時制は現在形が用いられており、語り手の人称は“we”の一人称で、語り手の名称は明示されず、その視点はFieldと共にいる作中人物として固定されており、Fieldは外的視点から客観的に描写されている。‘A Detective Police Party’では、前者と同様に、時制は現在形が用いられ、語り手の人称は“we”の一人称で、名称が明示されていない作中人物からの外的視点からWieldは描写されている。しかし、後半部分でWhichemによって語られる物語では、過去時制が用いられており、その続編とされる‘Three “Detective” Anecdote’でも同様に、WieldやDorntonによって語られる物語でも過

去時制が用いられている。他方、Bleak Houseでは、局外の語り手とEstherによる一人称の語り手が交互に登場するが、局外の語り手の場合は現在時制が、Estherの場合は過去時制が用いられている。一見すると、二つの時間が混在しているように見えるが、物語内の体験する時間は同じである。つまりEstherの語る話が局外の語り手による話よりも過去に起こった事柄ではなく、どちらも同じ時間枠で行われているということである。局外の語り手の現在は、Estherの回顧する過去を、現在のことであるかのように用いているに過ぎないのである。BucketはEstherからは外面が、局外の語り手からは外面と内面の両方が描写されている。ここに見られる差異は、時制、語り手の位置および描写のされ方にある。

過去時制は虚構を表す信号の一つとされているが、過去時制で語られていない虚構テキストは幾らでもあるし、過去時制で記述された記事や判例文は多数挙げられる。よって、時制が虚構を示す決め手とは必ずしもならないように見える。しかし、小説や物語テキストにおいては、過去は単なる物語る声にとっての過去ではなくて、歴史記述にとっての過去の意味であり、記憶にとっての過去の意味なのである。つまり、屋根裏部屋から主人公の日記を発見したとか、旅行者から物語を聞いたとかの見せかけをする小説家の技巧でもある¹⁶。K. Hamburgerによれば、三人称小説においては、「言表行為主体」（作者もしくは語り手）と「言表主体」（テキスト内部における主体）との乖離が生じる。それによって、物語の主体として知覚される「原点の私」は現実の「言表行為主体」から虚構的な「言表主体」へ取って代われ、「言表行為主体」は後退する。「言表主体」がテキストの主権を獲得する装置として、小説言語の過去時制が役割を果たし、テキストで叙述される過去形は、時間的には過去を示す機能を喪失しており、むしろ現在を表し、「原点の私」を現実の私から虚構の私へと譲り渡す機能をもっており、結果的に、物語世界は現実世界とは別の現実味を帯び、「現実のものとして」受容されることになる。このHamburgerの虚構論は、一人称小説を虚構から除外するものであるが、G. Genetteは一人称小説の語り手も、「言表行為主体」とは切り離された「言表主体」であり、虚構の構築物であるとして、批判を加えている¹⁷。この虚構論に従えば、'A Detective Police Party'で語られる"Tally-ho Thompson"の物語も、'Three "Detective" Anecdote'の中の三つの逸話も、「本当らしさ」を装うための語り手の技巧によって、虚構のものとなっていると言える。Bleak Houseでも同様に、過去時制が用いられていることにより、Estherが語る一人称では「言表行為主体」が主人公であるEstherという「言表主体」へ取って代わられており、また無人称の局外の語り手も作者である「言表行為主体」から切り離された「言表主体」となって、物語を「現実のものとして」語るのである。

これを基に、三者が語り手によってどのような位置から描写されているかを見てみよう。FieldやWieldは共に三人称で指示され、しかも外面的な描写、つまり人物が内側から描かれることがない客観的視点からの描写がなされている。それに対し、Bucketは三人称によって指示され、大方は外面描写ではあるが、時として局外の語り手によって、内面描写がなされている。

The fair Volumnia, not quite unconscious perhaps of the humanizing influence of her charms, pauses in the writing of cocked-hat notes, and meditatively adjusts the pearl necklace. Mr Bucket prices that decoration in his mind, and thinks it as likely as not that Volumnia is writing poetry. (Bleak House, p.716.) (イタリックは筆者)

この引用でも明らかのように、“in his mind” や “thinks” といった言葉は作中人物の内面が外部の語り手によって述べられていることを示している。内面の描写は特に小説言語において特徴的なものであり、Bucketを虚構たらしめているもう一つの信号でもある。

指示や語りの観点からの三者の差異性は次のようになる。Fieldは実在の警部を指示しており、その描写も外部から客観的になされており、‘On Duty with Inspector Field’ がジャーナリスト的なものとなっている。Wieldは現実世界に存在するものとして描かれてはいるが、その指示は虚構であり、後半部分で語られる物語やWieldが語る物語は虚構の構築物となっており、‘A Detective Police Party’ や ‘Three “Detective” Anecdotes’ は虚構テキストであると理解される。またBucketは指示においても描写においても虚構であることは明らかであり、その背景となる小説全体も虚構世界となっている。

IV

Field、WieldおよびBucketの類似性と差異性は上述の考察によって明らかになった訳だが、ここで確認しなければならないことは、虚構論には虚構行為論と虚構認知論があるということである。前者は、虚構を制作する側の局面から探求するものであり、後者は、虚構を認識受容する側の局面から解明するものである。それはDickensがBucketの造形はFieldとの経験を基にしたのではないとする一方で、多くの批評家たちがFieldがBucketの原型であると主張する対立意見の根幹をなすものである。Dickensは虚構行為の観点から、批評家たちは虚構認知の観点から、主張しているに過ぎないのである。よって、双方の主張は共に真であるとも言える。

DickensはBucketを造形するにあたって、Fieldとの経験が意識下にはあったのかもしれないが、呼称をFieldとは同定されないBucketにし、虚構を示す作中人物の内面描写という語り的手法を用い、虚構の物語世界に配置するという虚構行為によって、読者に虚構の人物であると認知させようとした。更にBucketがFieldでないとする別の理由として、Bucketが金に執着心があるように描写されており¹⁹、その呼称もかつての悪名高き汚職判事であるBasket判事を想起させるものであったことも十分考慮に値する。DickensにとってBucketがFieldであるとされてしまったのは、Fieldの名声を汚すことにもなるからだ。Harold Skimpoleのモデルが親友のLeigh Huntであったことを早々と認めたのに対し²⁰、BucketをFieldとは認めなかったのには、虚構の制作者である

Dickensにとって、意識の中では、Bucketは虚構の人物であり、また読者にもそのようなものとして認識して欲しかったからだと推測も了解されるであろう。

またWieldの場合はむしろその逆で、もし語られた内容が一字一句Fieldの言葉の通りであるとするならば、Wieldという呼称を用いずに、'On Duty with Inspector Field'のようにFieldという実名を用いればよかった訳で、あえてWieldという呼称を用いたのは、物語が現実の語り手の手を離れ、おもしろい読み物となるよう作者の手によってある程度脚色されたに他ならないからである。読者に物語が「本当であるように」見せかけるために、そして当時の実在する刑事部門の人達の優秀さを称賛する意味でも、すぐに実在の人物と同定できるような呼称にする必要があったのである。そのためにもFieldは、Bucketではいけなくて、Wieldにならざるを得なかったのである。

註

1. Bleak House からの引用はすべてOxford Illustrated Dickens 版に拠る。Bleak House (1853;Oxford:Oxford University Press,1982), pp.307- 8.
2. Bucket、Wield およびField の類似性の詳細については、Philip Collins, Dickens and Crime (London: Macmillan & Co Ltd,1965), pp.196-219.を参照。尚、Bleak House における「原型」を“romantic” と“familiar” な側面からの読みを試みたものとしては、Kenneth Fielding, 'Bleak House and Dickens' Originals: 'The Romantic Side of Familiar Things', Dickens Studies Annual vol.24. (New York: AMS Press,1996), pp.119-134.
3. The Times, 17. Sep.,1853. および The Letters of Charles Dickens, vol.7 (The Pilgrim Edition) (Oxford: Clarendon Press,1993), p.149n.
4. The Letters of Charles Dickens, vol.7, op.cit., p.149.
5. 'A Detective Police Party,' Household Words (27 July 1850;10 August 1850); 'Three "Detective" Anecdotes,' Household Words (14 September 1850).
6. Peter Ackroyd, Dickens (London: Minerva,1991), pp.629-30. 参照。
7. 'A Dictionary of Bleak House Originals: Persons and Places,' Bleak House (Norton Critical Edition) (New York: W.W.Norton & Company, 1977), p.891.
8. The Letter of Charles Dickens. vol. 6. (The Pilgrim Edition) (Oxford: Clarendon Press, 1988), p.755.
9. 'On Duty with Inspector Field,' Household Words (14 June 1851).
10. また 'A Detective Police Party' において、Wield 以外にもWalker 警部はStalker 警部に、Thornton 巡査部長はDornton 巡査部長、Whicher 巡査部長はWhichem 巡査部長 といった風に、即座に現実世界の人物を指示できるよう呼称されている。
11. 'On Duty with Inspector Field,' op.cit.,p.266.
- 12.The Times (17 September 1853)およびPhilip Collins,op.cit.,p.210.参照。

13. 'To The Editor of The Times,' (13 November 1849) The Letter of Charles Dickens. vol.5.(The Pilgrim Edition)(Oxford:Clarendon Press,1981),pp.644 5.
14. B. B. Valentine, 'The Original of Hortense and the Trial of Maria Manning for Murder.' Dickensian 19 (1923), pp.21-2.
15. Bleak House における原型に関しては、George F.Ford,op.cit. 参照。
16. Paul Ricoeur, Time and Narrative vol.2 (Chicago: The University Chicago Press,1984), pp.98-99.参照。
17. Kate Hamburger, The Logic of Literature (1957; Bloomington: Indiana University Press, 1973); Gerard Genette, Narrative Discourse Revisited (Ithaca: Cornell University Press,1983); 中村三春『フィクションの機構』(ひつじ書房、1994) 参照。
18. F. K. Stanzel は内面世界の描写についてこう述べている。 "The presentation of the thoughts, perceptions, feelings and the state of mind of the characters within the domain of all narrative literature, but it is especially prominent in the novel. F. K. Stanzel. A Theory of Narrative (1979; Cambridge: Cambridge University Press, 1984), pp.126-7.
19. Bucketには常に買収、報酬、懸賞金といった金がまわりついている。そしてBucketが次のように独り言を言う場面がある。 . . . I could have made the money without this anonymous information. (Bleak House , p.715).
20. The Letter of Charles Dickens vol. 7., op. cit., p. 460&460n. (Early Nov. 1854)およびその経緯に関しては、John Forster, The Life of Charles Dickens 2vols (1927; New York: Dent&Sons (Everyman 's Library), 1980). II. pp. 101-2.参照。
1. Bleak Houseからの引用はすべてOxford Illustrated Dickens版に拠る。 Bleak House (1853;Oxford: Oxford University Press, 1982), pp.307-8.
2. Bucket、WieldおよびFieldの類似性の詳細については、Philip Collins, Dickens and Crime (London: Macmillan & Co Ltd, 1965), pp.196-219.を参照。尚、Bleak Houseにおける「原型」を "romantic" と "familiar" な側面からの読みを試みたものとしては、 Kenneth Fielding, ' Bleak House and Dickens' Originals: ' The Romantic Side of Familiar Things' , Dickens Studies Annual vol.24. (New York: AMS Press, 1996), pp.119-134.
3. The Times, 17. Sep., 1853.およびThe Letters of Charles Dickens, vol.7 (The Pilgrim Edition) (Oxford: Clarendon Press, 1993), p.149n.
4. The Letters of Charles Dickens, vol.7, op. cit., p.149.

11. 'On Duty with Inspector Field,' op. cit., p.266.
12. The Times (17 September 1853)およびPhilip Collins, op. cit., p.210.参照。
13. 'To The Editor of The Times,' (13 November 1849) The Letter of Charles Dickens.
vol.5. (The Pilgrim Edition) (Oxford: Clarendon Press, 1981), pp.644-5.
14. B. B. Valentine, 'The Original of Hortense and the Trial of Maria Manning for Murder.' Dickensian 19 (1923), pp.21-2.
15. Bleak Houseにおける原型に関しては、George F. Ford, op. cit.参照。
16. Paul Ricoeur, Time and Narrative vol.2 (Chicago: The University Chicago Press, 1984),
pp.98-99.参照。
17. Kate Hamburger, The Logic of Literature (1957; Bloomington: Indiana University Press,
1973); Gerard Genette, Narrative Discourse Revisited (Ithaca: Cornell University Press,
1983);中村三春『フィクションの機構』(ひつじ書房、
1
994) 参照。
18. F. K. Stanzelは内面世界の描写についてこう述べている。 "The presentation of the
thoughts, perceptions, feelings and the state of mind of the characters is within the
domain of all narrative literature, but it is especially prominent in the novel." F. K.
Stanzel, A Theory of Narrative (1979; Cambridge: Cambridge University Press, 1984),
pp.126-7.
19. Bucketには常に買収、報酬、懸賞金といった金がまとわりついている。そして
Bucket
が次のように独り言をいう場面がある。 "...I could have made the money

without this

anonymous information.” (Bleak House, p.715).

20. The Letter of Charles Dickens vol.7., op. cit., p.460 & 460n. (Early Nov. 1854)およびその経緯に関しては、JohnForster, The Life of Charles Dickens 2vols (1927; New York: Dent & Sons (Everyman's Library), 1980), II. pp.101-2.参照。